

C-6 母親の就労が子どもの性役割認識の発達に及ぼす影響
広島大教育 伊藤富美 ○藤原純子

目的 既婚婦人の就労が増加している今日、働く母親は子どもの精神的発達過程に様々な影響を及ぼしていると思われる。特に性役割認識の発達段階にある児童期において子どもが働く母親を持つ場合とそうでない場合とで職業上の性役割認識にどのような差異が生じるのであろうか。「就労する母親を持つ女兒において職業的性役割のstereotypeが弱い」というCarolynらの研究をもとに、本研究はわが国の現在の社会状況の中で母親の就労が子どもに及ぼす影響を子どもの職業的性役割認識との関係で捉え、男女差、年齢差について検討した。

方法 対象——広島県福山市、三原市、安芸郡の4つの小学校から2年生(8才)、4年生(10才)、6年生(12才)の男児295名、女児258名。母親が専門職の男女児98名、中学2年生(14才)38名、大学生80名。手続——質問紙を用いて集団の場でinstructionを与え回答させた。男性的、女性的それぞれ5種類の職業における職業役割指数を算出し母親の就労(家内就労・家外就労)・非就労について男女別、年齢別に比較した。

結果 性差——母親の就労は女兒により大きな影響を与える。また、母親の就労は女兒のstereotypeを強める一方、男児のstereotypeを弱めて男女児の職業的性役割認識を接近させる傾向があった。年齢差——母親が就労している場合、年齢が増加するに伴ってstereotypeは強まり、反対に母親が就労していない場合、10才児においてstereotypeが急に強化される傾向が認められた。